

100 世界遺産の旅 (88)

古希からの旅路

蓄財は儘ならずとも、蓄歳は着実に重ね、2019年3月に古希を迎えた。旅は実践型体験と云われ、認知症予防に有効らしい。旅行計画時の高揚感、訪問先での不安感と陶酔感、無事に帰国しての安堵感、そして情景が、走馬燈のように夢に現れる。

さて、60歳から75歳までの15年間は人生最後の黄金期と云うらしい。5年を1節目と考えれば、第2節の終わりが、70歳の古希で、それは、神戸市男性の健康寿命70.1歳にほぼ符合する。何時まで旅を楽しむ争が出来るか分からないが、古希からの旅路は、少し慎重を期する必要があるようだ。



王宮前、カトマンズ、ネパール、2013年3月

幸いにして持病も無く、古希を迎えたが、私は、一体何者だったろうかと振り返ることがある。どうも私の特性は、「嫌デスク・ワーク症候群」の一員のように思う。この症候群は、学生時代においては悲惨であったが、会社の営業職であれば、外回りの間は、デスク・ワークから解放される。ただ、国内営業だと1~2日だが、国際営業だと10日程海外で過ごし、机に向う必要が無い。その間のデスク・ワークは、助手に任せれば良いことになる。26才で韓国へ、30才代は東南アジアへと飛び回った。40才でアメリカへ行った時、こうなったら全世界を見てやろうと云う強い願望が沸き、45才時、3週間のヨーロッパ研修では、「もう仕事をしている暇は、無かたですたい！」と覚悟を決めた。そして仕事に飽きたとして、55歳で定年60才のゴールを目指した。仕事が、人生の目標ではないとする気楽さが、「嫌デスク・ワーク症候群」の神髄なのかもしれない。

当然、悪弊極まる残業は皆無であり、大阪香里園時代は、会社にも近く、夕方6時に帰宅し、よく子供達を河川敷へ連れて行ったものである。お陰で子育ては、平穩無事に終了した。50才で、長女が結婚し、53才で、次女が大卒後就職したので、金銭的負担より解放された。そして還暦を迎え、人生最後の黄金期と云われる15年に突入した訳である。

話は変わるが、何故、浦島太郎は、乙姫と別れて享楽の竜宮城から現世へ戻ってきたのだろうかといつも考えていた。結局のところ、人生には、節目、潮時があり、残された時間で「自分がやりたい事を成し遂げる」ため帰郷したと結論づけた。



グエル公園、バルセロナ、スペイン、2010年7月

若い時は、多少の無理も出来たが、健康寿命を越える歳になってはそうはいかないようだ。現在、足腰に問題は無いと云えども、日々のテニスは軽登山へ、軽登山は歴探ハイクへと時間割を変更し、何時までも2足歩行が出来る様に、足腰をプロテクトしている。それに加え、ハワイアン音楽をこよなく愛していきたい。いわゆる動的活動から静的活動への転換期が、古希かもしれない。



自由の女神、USA、2005年9月

旅で心配なのは、心臓や脳の循環器系疾患で、何時遭遇するか予見できない。昇天しまえば、ピンピンコロリで理想的なのだが、怖いのが、後遺症である。そこで、策として、我が日常の体調を承知している家人に、旅の同行をお願いすることになる。

旅は「一人だと寂しい」、一方「家人が一緒だとうるさい」が率直な捉え方だった。その考え方を改め、家人と思い出を共有し、いやが上にも快く朽ちて行かねばと覚悟を決めた。「穢土・現世の旅」の終着駅は、死であるが、そこで「浄土の旅」へ路線を変更すれば、旅は、永遠に続く様に感じ始めた。